

人権感覚を育てるためのアクティビティ 「私たちは、地球に住む”人間”です！」

<方法>

- (1) 学習者1人1人に5枚ずつカードを配ります。
- (2) 間もなく自分たちの町に宇宙人たちが訪ねてくると仮定して、地球上に住んでいる”人間”について知りたがっている宇宙人に対して「わたしは、こういう”人間”です」と自己紹介する内容を、それぞれの1枚のカードに1項目ずつ、合計5項目書かせます。

- (例) ① 「わたし／ぼくの名前は、〇〇といます。いま、〇歳です」
② 「ぼく／わたしの家族は両親と弟の4人です。△△に住んでいます。」
③ 「わたしたちは、一日に3度、食事をします。主食はお米です。」
④ 「わたし／ぼくは将来、□□になるのが夢です。」
⑤ 「ぼくは中学校でサッカーをやっています。」「わたしは、テニスが得意です。」
⑥ 「ぼく／わたしは、学校から帰ると、マンガを読んだりファミコンを楽しみます。」
⑦ 「わたし／ぼくは人権ポスターコンクールで 特別賞をもらいました。」

などなど

- (3) 配られた5枚のカードにそれぞれ、自己紹介したい内容を書き上げたら、その5枚のカードのなかで、自分にとって、それほど重要ではないと思われる内容のカードを1枚取り出させます。
- (4) こうして同じ事を4回繰り返して、子どもにとって、一番大切に、奪われたくないと考えるカードを最後に1枚 残させます。
- (5) それぞれに「ぼく／わたしが人間である」ためにどうしても譲れないもの、本当に必要なものとして最後に残したカードには、どんなことが書いてあるか、なぜそれを残したのかを交流します。
- (6) あるいは、どうしても必要だと考えて残したカードに書かれていることが、同じ日本の国に住んでいる全ての人々に、また世界中の人々に等しく与えられているか、もし、そうしたことが保障されていないとすれば、なぜなのか、といったことに焦点を当てて、お互いの意見を述べ合います。

<生徒の反応の捉え方>

- ・自分の名前を書いたカードを最後に残す生徒が多くいます。一人一人の名前が単なる区別する記号でなく、両親をはじめ身近な人々が願いや愛を込めてつけたものであること、それ故に誰もが等しく「かけがえのない存在であること」を体感します。誰かをあだ名で呼んだり、誰かを馬鹿にしたり傷つけたりする行為があるとすれば、それは何を意味するのかを考えさせる展開も可能です。
- ・自分の将来の希望や目標を書いたカードを残す生徒が幾人かいます。将来の希望をかなえるために今、学校で学んでいるということから「教育を受ける権利」について考えることができます。この権利は誰にも保障されているのでしょうか、保障されていないとするならばどんな場合なのか、何がその妨げになっているのかなどと話し合いを広げつつ自分を振り返ります。